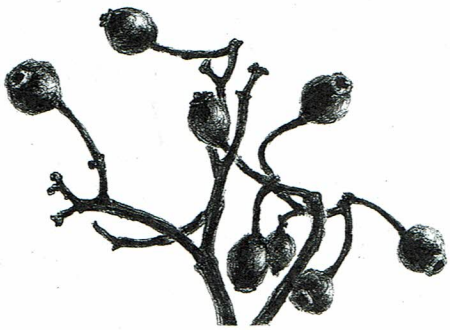
朝日 俳壇 歌壇



〈ノイバラⅣ〉　日高理恵子

高山れおな選

空っぽがかっぽしているあきの空　（東村山市）内海　亨

啄木鳥の音微かなり盛んなり　（香芝市）土井　岳毅

フェルメールの光溢るる竈猫　（大阪府島本町）山岡　俊介

ウインナのたこが千匹運動会　（仙台市）三井　英二

駅長も駅員も猫山眠る　（鴻巣市）清水　基義

落葉踏む父八十の痩せ柱　（神戸市）豊原　清明

天赦日混み合ふ宝くじ売場秋　（武蔵野市）相坂　康

窓際の猫のとなりに茸干す　（和歌山市）高井貴佐子

新米のおむすび宮古島の塩　（東京都）伊東　澄子

コスモスゆれる神様の言うとおり　（尼崎市）吉川　佳生

【評】内海さん。「かっぽ」は「闊歩」。空っぽと感じるまでに身も心も軽く。「で」でなく「が」としたのが効果的だ。土井さん。遠く微かな音から、啄木鳥の元気潑溂さを読み取った。山岡さん。《牛乳を注ぐ女》なら竈猫も似合いそうだ。

小林貴子選

老いの焚く内燃機関冬に入る　（東京都）吉竹　純

モップかけ終へて体育館夜寒　（所沢市）木村　佑

勝ち負けの好きな生き物秋の風　（南房総市）山根　徳一

等伯を熱演能登の文化の日　（埼玉県宮代町）酒井　忠正

君鳴くや百舌だったっけなんだっけ　（東村山市）内海　亨

秋なすびのやうなイルカの肌触り　（横浜市）佐々木ひろみち

蜜吸うて鵯の鳴き声甘からず　（名古屋市）鈴木　修二

満月と合せ鏡がしてみたい　（奈良市）橋本　靖子

いつまでもながめる男松手入れ　（川崎市）小関　新

柚子湯して明日も在宅勤務なり　（広島市）村越　縁

【評】一句目、活発に追い焚きをして、厳しい冬を乗り切ろう。二句目、使った後に清め、夜寒の体育館は深閑と。三句目は人間の一面だが、俳句は勝ち負けではない。みんな良い。四句目、今年の国民文化祭の一環として仲代達矢さんが演出。

長谷川櫂選

戦争がまたも茶の間に立つて秋　（昭島市）大関　崇央

蘇州号で渡る上海秋の海　（米原市）米澤　一銭

七輪といふ語懐かし初秋刀魚　（千葉市）愛川　弘文

ストーブに遠く膝抱き眠る人　（高山市）直井　照男

琉球の声に聞き入る夜寒かな　（京丹後市）小谷　正和

唐辛子花束にして真紅　（長野市）縣　展子

南へ蝶の渡りし秋日和　（高知市）和田　和子

老妻の起床に安堵秋の朝　（長崎県小値賀町）中上庄一郎

案の定ランボー読めば風邪ひけり　（栃木県壬生町）あらゐひとし

動物の残してくれし栗拾ふ　（対馬市）神宮　斉之

【評】一席。〈戦争が廊下の奥に立つてゐた〉（渡辺白泉）。もはや茶の間に。二席。晴れ晴れとした上海の秋。海風を全身に受けて。三席。すぐかっと火がおこるのでこう呼ぶとか。上方の言葉。十句目。もともとは動物たちの土地。

大串章選

憎しみの連鎖いくさの冬深し　（福島県伊達市）佐藤　茂

枯野行く戻りの余力図りつつ　（大和郡山市）宮本　陶生

蓑虫の蓑の中にも夢一つ　（八王子市）額田　浩文

月へ行く道も見えたり大枯野　（金沢市）前　九疑

ようこそと民話の里の蕎麦の花　（栃木県壬生町）あらゐひとし

ひらがなに漢字カタカナ文化の日　（名古屋市）木俣　正幸

透明の影を持ちたる露の玉　（高松市）渡部　全子

ゆく秋や踏切の灯のやはらかき　（越谷市）新井高四郎

受勲者に俳人さがす文化の日　（島根県邑南町）椿　博行

人生の止り木秋の純喫茶　（今治市）松浦加寿子

【評】第1句。「憎しみの連鎖」を断ち切れない人間の愚かさ。いつまで戦争を続けるのか。第2句。枯野を行く途中でぶっ倒れては元も子もない。「戻りの余力」を考慮しながら進む。第3句。小さな袋の中にも「夢」は必ずある。

俳句時評　尖鋭の受け皿

阪西　敦子

「文学フリマ東京37」が11月11日に開催された。出店者が「自分が〈文学〉と信じるもの」を展示して直接販売する大規模イベントだ。1843の出店があり、1万2890人が来場した。その中から、俳句同人誌3冊を紹介したい。

「天秤」は1990年代生まれの作家3人が制作。この日に合わせて作られた作品と鑑賞からなる創刊号は、自らの手による活動の場を得た楽しさに溢れる。山本たくみの新作〈はつ秋や納豆フィルムねぢり取り〉は、作業の体感を読者に伝え、初秋の空気の変化を描き出す。

2021年5月に創刊された「ねじまわし」の特集は「神野紗希はいま何を考えているのか」。創作の初期から常に注目されてきた作家を丹念に読み解く中で、俳句における日常性の位置づけ、口語と文語、作者と作品の同一性などを問い直す。例えば、神野の作品〈やさしいね涼しいね生きていたいね〉。季語「涼し」を句の中になじませつつ、語りかけの繰り返しの終わりに、「生きていたいね」によって日常と普遍を繋ぐ。

「オルガン」は2015年の創刊で、メンバーは5人。鴇田智哉の〈秋雨を象の黒眼の後ずさる〉は、象の体でなく黒眼を描くことで秋雨の明度・質感を描く。今回は「ねじまわし」のメンバーとの座談会も組まれた。俳句を俳句たらしめるものとは何かを、主題、季語、過去との関連、読みといった側面から探る。俳句の現在地がよく分かり、刺激的だ。

混濁の中に宿る尖鋭を示す3冊。独自の表現の受け皿としての文学フリマの役割に、今後も期待したい。（俳人）

風信

金子冬実著「まぼろしの枇杷の葉蔭で」
戦後を代表する歌人の一人で、「幻視の女王」とも呼ばれた葛原妙子について孫娘の目でつづったエッセー。（書肆侃侃房・1760円）

松村由利子著「科学をうたう センス・オブ・ワンダーを求めて」 ウイルスや原発事故、AIなど科学を題材にこの10年余に詠まれた約300首の短歌を読み解く。（春秋社・2530円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。